

[016]史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2341022>

出版情報 : 史淵. 16, 1937-07-05. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン :
権利関係 :

彙報

第九回九大史學會大會

昭和十二年の九大史學會大會は五月九日開催。今年度の展覽會は多數の方々の御好意によつて陳列品を諸方面より拜借し得た事、又講演會に關しては講演終了後直ちに旅行に御出發になつた程御多忙中の桑木先生を煩はしたことを深謝致します。

○展覽會

午前十時より今川橋金體寺に於て開催貝原益軒關係史料を展覽。貝原家より益軒愛用の長さ四尺幅一尺五寸に餘る大机迄も拜借し得て感慨深いものがあり、來觀の會員の多きこと近年に其の比をみない程の盛會であつた。陳列の品目左の如し。

貝原家所藏

- 一、益軒先生年譜
- 一、神儒並行不相悖論。
- 一、和學一步。
- 一、風土記。慎思錄。十論。知約。雜稿。雜記。備忘錄。文武訓。

竹田家所藏

- 一、寬文日記。貞享日記。元祿日記。居家日記。用樂日記。撰時日記略。篤信一世用財記。
 - 一、江戸紀略。江東紀行。行裝記。
 - 一、春芳園記。
 - 一、古今和歌集。(益軒書入版本)
 - 一、俗語。(東軒謠書)
 - 一、歸去來辭。(額)
 - 一、竹園臺省書叢。(京都在留時代史料卷物)
 - 一、机。
 - 一、天盃。(元祿十二年賜宴盃)
 - 一、禁裡御備物入。
- 竹田家所藏
- 一、神儒並行而不相悖論。
 - 一、同。石刷。
 - 一、益軒書。二幅。
 - 一、益軒肖像。(竹田春菴整)
 - 一、益軒叢書。
 - 一、貝先生文集。
 - 一、詩經要義。
 - 一、知約。
 - 一、君子訓。
 - 一、香譜。
 - 一、撰時先生年譜。

一、貝先生年譜。

一、篤信編輯著述書目。

一、春菴先生遺文。

箱崎神社所藏

一、益軒遺愛琵琶。

一、益軒後叙譽田八幡宮縁起。

林家所藏

一、延寶七年日記。

福岡女子師範學校所藏

一、竹田定直書簡。

一、益軒肖像寫。(原本貝原家藏、狩野昌運筆)

伊東家所藏

一、益軒書入職原抄(木版)。

一、東軒夫人筆古史斷句。

一、同 倭姫世紀。

九大圖書館所藏

一、益軒書簡(百九卷之内)四卷 家譜 風土記 書籍 雜

各一卷

○講演會

午後一時より福岡市記念館に於て左の講演あり、梗概次の如し。

一、明治以前に於ける日本の自然科學

桑木 或 雄氏

羅針盤は、歐洲に於ては一三六〇年頃、ナボリの一人によつて發明せられたものであるが、磁石は既に十二世紀の頃から使用せられてゐた。亞歐交通の、記録に現れる最初のものをなしてゐるヂェスイツトの渡來の時には、既に之を使用してゐた。

十八世紀に至つて、支那在住の宣教師によつて支那研究が始められ、指南車の事が研究せられて來ると、之は磁石の事を云ふものであらうと考へられて來た。又黃帝軒轅氏の條に、鼠と馬とを示し其の間に針があると書いてあるのは、子午線の事であらうと云はれる。その他指南車の記事は古今註、呂氏春秋を始め齊、唐宋各時代に見え、宋時代のものは構造も詳しい。又明時代の三才圖繪には人形がのり右手をさしてゐる。

我國に於ては、齊明天皇の四年、沙門智諭が指南車を造り、天智天皇五年之を獻じてゐる。支那の歸化人が獻じた事も見えてゐる。元明天皇の和銅年中には近江の國より磁石を獻じた事が見えてゐる。扶桑略記には指南車をアシログルマと讀んでゐる。如何なるものであるかは不明である。

齊の祖沖之は、機械の發明乃至改造をした事が見えてゐる。其の中に「銅機圓轉不窮而司方如一馬釣以來未有也」と云ふ語があるが、この中から磁石を見出そうとする人もある。磁石の針が南北を指す事が明になつたのは十一、二世紀の頃の事で、一番古い記録は明時代のものである。然し風水家は宋時代から使つてゐた様である。

指南舟の事は構造不明ではあるが古今註、筆語、萍洲可談に見え、宋の朱或の書にある夜は星を見晝は日を見る。曇つた日には指南針を見ると云ふ事があるが之は明らかに磁石である。之が舟に羅針盤を用ひた記録として最も古いものである。

我國に於て羅針盤は鎌倉時代から室町時代にかけては既に使用せられてゐたもので、倭寇が旱針盤を用ひたと云ふ記事がある。庭訓往來の抄と註に、指南云々とあるのを註して、唐船には人形をたて針をつけてゐるが之は南北を指すと云ふ意味の事を書いてゐる。指南舟の如きものである。之は慶長年間頃の事である。又慶長見聞集に、人形が道を教へる事あり、針が道を教へる事あり云々、とあつて、舟底に入つて水に針を浮べて見る事ありと書いてゐるのは、水針盤の事であらう。然し天文年中の記録には太平洋の中風忽ち起り西東を知らず舟漂流して伊豆に至るといふ事があるから、天文年中には未だなかつたものであらうか。

一、西洋版日本地圖の發達について

竹岡勝也氏

西洋版世界地圖に現れた日本については、其の發達によつて、次の五時代に區分する事が出来る。第一傳聞時代、第二見聞時代、第三模倣時代、第四修正時代及び第五競爭時代である。

第一傳聞時代。十六世紀の前半をさすものであつて、未だ外人の日本渡來を見ず、單に大體の存在を傳へられた時代である。即ち、先にマルコポーロの東方紀行によつて、漸くジバングなる國の存在が紹介せられ、歐洲社會に大なる刺戟を與へたのであつた。それ以前には全然日本の存在は考へられてゐなかつたか、と考へて見ると十四、五世紀に於ける、世界に對する歐洲人の知識の飛躍は、サラセン人の傳説になる *Wakwan* 國の存在を示そうとしてゐる。一一五四年出版のイドリジイの世界圖は之である。その名稱は、倭國の名稱と甚だ類似するものがある。

第二見聞時代。十六世紀の後半をさすもので、日本に渡來した人々の報告により、日本が或る形をとつて來た時代である。即ちポルトガル商人ピントオの種ヶ島漂着を書いた旅行記、及び、フランシス・ザビエルの日本紀行等により、日本の地勢、數多の島國より成ると云ふ事

が傳へられ、又フロイス、カスバルピレラ等により秋田出羽等の東北地方及び琉球(Corria)方面に關する報告もされてゐる。然し此の場合、蝦夷は大陸の一部でありCorriaも韃靼と一緒にされてゐるのである。

第三模倣時代。十六世紀の終から十七世紀にわたり、伴天連等の持ち歸つた日本地圖を模倣した時代である。

圖は驚く程立派な日本の姿を示して來たが、未だCorriaは海により大陸と境してをり、蝦夷も未だ地圖に現れて來ない。一六五五年、マルチニー筆のものは朝鮮が半島となり、日本の北に蝦夷が意識され、修正的動きが見えてゐる。

第四修正時代。十七世紀の後半から十八世紀の前半に涉る時代である。日本より進んだ歐洲の知識技術を以て前代のものに修正を行つてゐる。其の問題となつたものは、日本の位置即ち北緯東經で、ウイリアム・アダムスロドリコ、ピスカイ等の實測により學問的注意が拂はれて來た、然し未だ蝦夷は大陸の一部であると考へられ、朝鮮も又島であると考へられてゐた。

第五競争時代。オランダを通じて學んだ蘭學の知識により日本自らも實測を始め、カムチャツカ發見以來のロシア、其の他英佛を交へて、諸國間の複雑なる關係を生じ日英佛露相互間に競争を生じた時代をさすのである。こゝに、間宮林藏の探險により樺太は島である事が判り

又蝦夷も伊能忠敬によつて實測せられ、終に日本全体にわたる實測地圖が完成したのである。(原田)

○晚餐會

午後五時より教育會館の階下に晚餐を共にす。席上會員の研究發表あり。

青木義憲氏は 益軒の神備並行論に就いて

伊東尾四郎氏は 貝原家及び益軒に關係ある竹田、江崎、鶴原、稻富、芝田、酒泉、宮川、宮崎、勝木、藤井の諸家に史料を採訪された體驗談を述べられ九時頃散會、大會の行事全部を終了した。

國史學會

新入生歡迎會

今年度新入生歡迎會を五月一日惠愛會館に於て舉行。長沼先生、竹岡先生、鏡山先生の御出席を得副手二三年學生諸兄の外藤原、有光兩先輩の御出席を得て、新入の岩田、大杉、高橋、諫山の四君を迎へた。

國史科新入生歡迎遠足

國史科新入生諸君歡迎の意味で久し振りに遠足を行つた早く實行すべき所色々の行事やら支障のため延び／＼になつて五月卅日日曜日午前七時廿五分吉塚に發て若杉

山に向つた。

紙魚の香を離れ山の氣を吸ひ一同意氣大いに揚り、正午頃絶頂太祖神社の石段を上りつめへたばつた處で晝食を攝り小憩の後山の裏手へ廻りシヨク越の手前の谷間の芝生の上で團欒のしばしの時を送り小徑づたひに左谷へ降り建正寺の國寶佛像を拜觀、須惠より自動車にて歸福したのは豫定より遅れる事數刻七時に近かつた。それでもまだ名残り盡きずいつの間にやら恒例となつたピール園での乾杯で快氣焰をあげて散會。この一日を稱してハイキングデーといふ。参加者は鏡山先生をはじめ波多野副手、有光原田榊原三先輩、學生は城福井上江口菅瀨岩田大杉諸氏、本田氏は郷里より急用あり途中より歸宅されたのは遺憾であつた。以上

昭和十二年度 國史科卒業論文題目

- 室町時代に於ける博多商人の擡頭と發展有 光保 茂
- 宗金と其の家系の研究を中心として 池田 富雄
- 佐賀藩の刑罰制度について 大谷 權次郎
- 江戸時代に於ける人口問題と人口論 野口 絢齊
- 平安朝末期に於ける公卿の私的牛活 野口 絢齊
- 特にその子弟教育態度に就て
- 上代服飾に關する一考察 原田 文枝

連歌師の生活

松本とめ

平安鎌倉時代に於ける起請文の研究

宮下 勝次

支那學會

九州支那學會設立さる

昭和十二年六月十三日(於教育會館)

かねて目加田助教を中心として章圖されて居た九州支那學會が遂に本日を以て具體化される運びとなつた。斯學に關心を有する者の聯絡親睦を圖り、益々其れをして發展せしめんが爲である。高校、高商、女專より以下中等學校の教職員に呼びかけ、大に其の共鳴を得て、是に第一回の參會を見るに至つたわけである。

此の日集る者約四十名、先づ西本助手の開會の際について目加田助教の本學會設立に就いての説明あり、續いて重松教授の講演に移る。「歐洲に於ける支那風研究」と題されて熱辯を奮はれ大に啓發される所があつた。講演後座談會を開き今後の方針などに就き種々協議した。五時解散。因に本會の事業としては春秋二回に大會を開催、毎月一回例會も開くことになつて居る。(安倍)

支那學會の遠足

昭和十二年五月三十日(日)

支那學の同人十一名打揃ひ恒例のピクニックを催す。

午前十時新博多驛發、西戸崎に向ふ。天氣良好、青松白砂を車窓に送迎する又快適。西戸崎より徒歩にて志賀島に向ふ。途中、幽にして又玄なる海潮の調べに耳を傾けつ、天籟鳴る老松の綠蔭に雅宴を張る。能古の蒼翠人の眉宇を撲ち、遙遠の彼方に筑西の風光を追ふ。

志賀島は全山殆ど枇杷を以て覆はる。徑を左手に取り金印の古跡に暫時足を止む。又行くこと數丁、蒙古塚に至る。無言の石塔往時を語るに由なし。

歸途は船便によれり。五時築港着。恙なく一日の快を盡せしを祝して解散せり。
(安倍)

西洋史學研究會

五月卅一日午後一時より第二學生集習所において例會開催、長教授小林講師學生一同出席左記の紹介あり、終つて長教授の御批評、出席者の質疑應答があつた。

一、一八七八年九月十七日ビスマルクの議會演説

田中友次郎

一、G. P. Gooch: Before the war Studies in

Diplomacy (1936) に見るフランスの事件

中根四郎

一、A. Gann: La Restauration et les Bie, des

Emigrants の紹介 辛島重義

田中氏は十月十九日の Sozialistengesetz 可決前の

ビスマルクの二つの議會演説即ち九月十七日及び十月九日のその中、前者において彼がラッサールを賞揚し、その後の社會民主黨の現社會組織破壊的なる傾向を痛撃し、國家の自衛的抑壓手段を要望せることを紹介批判された。(Bismarck, Die gesammelten Werke, Bd. XI.)

中根氏は前記グーテの近著において、一八九八年七月十日マルシヤンのフアシヨダ着より翌年三月英佛間の協定成立に至る葛藤、特にテルカツセの外交的活動、その平和的解決に對する努力に刀點を置けるグーテの記述を紹介批判された。

辛島氏紹介の前記「復古王朝時代とフランス亡命貴族の財産」なる書は、ナンシー官立中學校在職 Prof. agr. たるガン氏が少數の限定出版として發行したもので、幸ひに我が西洋史學研究室が入手し得た貴重書であり、興味ある問題と考へられるので、こゝに稍詳細に氏の紹介を記載する。本書はガンがモーセル、ミューズ二州文書館及び國立文書館の文獻を利用し、一八一四年より三二年に互る間の財産處分問題を明かにし、殊に結論において政治的經濟的の二方面を強調したものである。フランス亡命貴族の財産處分問題は既に十九世紀初頭よりフランス内政上の一大難關であつたが、憲章第九條に關聯して更に複雑化し、或る意味においては復古王朝を滅亡に導く一因ともなつた。數度立案せられた財産還附また

は賠償案が悉く失敗し、政府もこの問題に匙を投げんとしつゝあつた當時二十年の王族暗殺事件により再度問題化せられて解決を意外に早める動機となつた。既に二年の新聞彈壓法に關聯して二四年には政府側の賠償案を發表、幾多の論難に遭遇して辛うじて可決され、二五年四月廿七日法の發布、五月一日よりの實施と急轉したが實施は容易ならず、しかも一部の亡命貴族を除く他の大多數はこの賠償案を圍繞して世襲財産法、長子相續法等と共に王政を動搖せしめる原因となつた。(原田)

受贈圖書雜誌(自昭和十二年三月至昭和十二年六月)

- 嗚呼紀州 創刊號
- 文科 第二卷第四號乃至第六號
- 地學雜誌 第五七五號乃至第五八〇號
- 筑紫史談 第七十集
- ふびと 第四輯
- 研究資料彙報 第十二卷第一號第二號
- 心の花 第四十一卷第四號第五號
- 國史學 第二九號第三〇號
- 皇學 第五卷第一號
- 京大文學部地理學研究報告
- 郷土史壇 第三卷第五號

- 日本古代研究所報告 第三卷第四卷
- 日本民俗 第二卷第十號
- 鴨台史報 第五輯
- 歷史研究 第十二卷第二號
- 歷史教育 第十二卷第一號
- 最近の經濟中學界 十二年度第三號乃至第六號
- 齊藤先生古稀記念論文集
- 史學 第十六卷第一號
- 史觀
- 史學概論 第十一輯
- 中學研究 第八卷第三號
- 史學消息 第一卷第五期乃至第七期
- 史學雜誌 第四十八編第四乃至第六
- 商業經濟發史
- 書紀集解 中卷
- 宗教研究 第十四卷第一號第二號
- 土佐史談 第五十八號、第五十九號
- 東洋文化 第一百五十一號乃至第五十三號
- 和文西洋史圖書目錄